

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	農業・食糧分野における国際協力で活躍出来るグローバル人材育成 ―H26年度海外農学実習「ネパール農業実習」―		
学部・研究科名	農学部		
実施期間	2014年9月14日～27日		
研修先(国・都市・施設名)	ネパール(ネパール農業省ネパール農業研究評議会、マルファ村)		
参加学生数	10名	知の森基金からの支援者	3名
プログラム概要	農学部在学中に身につけた専門知識と技術を海外(主に途上国)の現場において、どのように活かすことが出来るのか。今、世界でおこっている農業問題・食糧問題は、どのような農業環境と社会的構造の中で生じているのか。その問題の本質は何なのか。本プログラムは、信州大学農学部と学術交流協定を結んでいるネパール国農業省ネパール農業研究評議会の研究施設(首都カトマンズ標高1350m)と標高2650mのヒマラヤの麓の村マルファを中心に実施する。ネパールという農業生物多様性の宝庫でありながら、脆弱な食糧生産体制のもとに人々が暮らす「開発途上国」において、約2週間の研修先での活動とその経験から、このような問いに対して、自身で考え、学ぶための機会を提供し、将来、国際協力分野で活躍するグローバル人材の育成を目指す。		

実施状況・成果

本プログラムでは、本学で掲げている「国際化推進プラン」のなかの国際的通用性、国際的連携性を高めることに対して、同「信州大学グローバル人材育成計画」のHOP(グローバル社会に視野を広げるモチベーションづくり)およびSTEP(グローバル人材になるための知識・スキルの獲得)について、目的を達成することができた。

具体的には、まず、プログラム実施前の事前学習および実習参加者に課している集中講義「国際農学講義I」の受講により、実習に対する事前準備と学生のモチベーションアップを十分に行った。また、実際の実習において、農村から農業研究機関まで幅広い分野で実習を体験し、実習参加者の視点において経験、考えることができた。英語が通じる研究機関では、英語による自己紹介や関心のある研究分野についてスピーチをし、現地研究者とのディスカッションもおこなった。

同じく本プログラムで掲げた達成目標「外国語でのコミュニケーション、研究機関でのインターンシップ、農家ホームステイや現地市場での実地調査等を通して、自ら行動し、体験することで学び、経験を自分のものとすること」のうち、外国語でのコミュニケーションでは、研究機関や訪問した農学系大学において、研究者および教員と自己紹介や関心研究分野を話すことを通じてコミュニケーションを図った。また、農村調査においては、英語のできる村人と片言ながら会話をして交流をしていた。しかし、学生の英会話能力の点では、個人差があるとともに、癖のある現地英語の聞き取りに苦戦していた。また、農学系の専門用語や日常でよく使う英単語の語彙力不足もあり、思うようなコミュニケーションをとれなかったのも事実である。このことは、学生の現在の英語力、コミュニケーション力を自覚させるいい機会となり、今後、海外で研究、協力活動をしていく際にどのような学習準備をするべきかの意識付け、動機付けにつながった。

また、本実習中は、現地食を積極的に食べることに努めるとともに現地の野菜市場の調査等から、ネパールの食文化を理解し、使われている食材、香辛料等から日本との違いを理解した。また、農村や都市近郊農業の視察や農業研究機関の研究現状を知り、日本との比較から、ネパールの農業を発展させるためには、どのようにすべきなのかを学生自身が考えるとともに、教員を交えたグループディスカッションのなかから国際協力に必要な技術、協力方法、留意点などについても学習した。

学生の声①ー農学部・食料生産科学科 学生

ネパールでの経験は私にとって何もかもが新鮮で、毎日が発見と挑戦の連続でした。想像していた当たり前の風景や街並みも実際に見てみると新鮮でした。その場所に住む人たちの衣食住の文化を目の当たりにすると、実際に行ってみてみなければわからないことがたくさんあるということを実感しました。また、私は英語が苦手な人で現地の人と会話することに最初はかなり抵抗がありました。しかし何度も様々な人と会話することで少しずつそれもなくたってゆき、現地の人から様々な情報を引き出すことができました。この実習は日本にただでいるだけでは決して感じる事の出来ない、体験できないことばかりで、新しい考え方を身に付けることができました。最後に、ネパール農業実習では実習前と実習中のみならず実習後にもたくさんの人たちのお世話になりました。このような貴重な体験をさせていただき深く感謝申し上げます。

学生の声②ー農学部・応用生命科学科 学生

ネパール農業実習に参加した一番の目的は、自分が暮らしている環境と全く違う環境の生活を体験することでした。熱帯地域から山岳地域までの豊富な生物多様性を感じることができたのは、貴重な体験でした。気候区分の変化に伴う植生の変化を感じ、その気候区分に適した植物の栽培・利用現場を実際に見たことは、これから農業・自然環境について学ぶ上で視野を広げることにつながると思います。また、現地では農業機関や農家の見学をしましたが、やはり日本よりも農業技術や知識が劣っている面があると感じました。しかし、その中でも日本の農業では見たことのない工夫もいくつか発見し、様々な知識を吸収しようという、現地の方々の農業に対する貪欲な姿勢も見られ、多くの刺激を受けました。また、日本語の通じない現場での生活やインフラの整っていない環境に戸惑う面は多々ありましたが、全て良い経験になったと思います。

農学部と連携協定を締結している
マルファ村(標高2660m)での歓迎式



カトマンズの野菜市場での聞き取り調査



環境マインドによる清掃活動
(カリガンダキ渓谷、標高約2660m)

